

桐油の使い方

2019/08/01

考え方

- ① 桐(ゴマノハグサ科 ニホンギリ、台湾ンギリ)の油ではなく、アブラギリ(トウダイグサ科)のピンポン玉のような実から搾った油。日本産アブラギリと中国産アブラギリで成分が違うそうです。この油はシナアブラギリの実からとったものです。
- ② ストッカー社で実際にこれを使っているのを見た(1984)、BUGADA(2017)でも使用していた。
- ③ 乾性油(酸素と化合して比較的硬い酸化物ができる、桐油は乾性油の中で乾いた時点で硬いとされています)
- ④ ニスのように木材の表面に膜面ができるのではなく、木材の中にしみこませ材の中で重合し硬くなる。
- ⑤ 完全に乾燥するのに1か月くらいかかる、それまでは、タラタラからベタベタに。
- ⑥ と、いつの間にか乾き、それまで時々こすってやるとつやが出る。Lisa Stuhl 用に作ったヒノキ製Bb 管の1番の表面はこれを塗ったもの、ニスとは違った輝きがあって、素晴らしい。
- ⑦ この油は垢のテーブルなどに使う乾性油で、これを使った手法をオイルフィニッシュといいます(中川宅のナラのテーブルはこの方法とワトコワックスを併用して30年、全体ピカ、足の擦れるところはピカピカ、時々油で拭いてやります)

処理方法

- ① 細い棒かタコ糸のようなものに、各番管の内部が触れるように大きさを調整したスポンジをひもか木ねじを使用して固定し、これに油を含ませ、管の中に入れて出し入れをして塗ってゆく。
- ② 覗いてみて、塗れていれば光沢がある。暗い部分があればそこは塗れていないので、こうしたときは何回か、油付きのスポンジでこする。
- ③ 1番管は短い柄にスポンジを付けてやるとよい。
- ④ 口から垂れるほど1回で塗る(流し込む)より、薄く何度もぬぐい、伸ばす、ぬぐいのばすことをやったほうが良い。
- ⑤ もし口から垂れた場合、きれいにふき取る。ぬぐい方が足りないと継ぎ手の真鍮管の隙間にしみこみ、この中でゴム状に固まって抜けなくなる。真鍮管はきれいに拭うことをしてください。(これが一番注意する点です。)
- ⑥ 作業に使ったスポンジ、拭いた布は絶対にゴミ箱に彫り込まないこと、この油は酸素と反応しますので布のような表面積の大きなものであると発熱、発火します。実際に事故を起こした例があるので、注意してください。(これが2番目に注意することです。)
- ⑦ しばらくは袋の中に入れてないほうが良いでしょう。
- ⑧ あちこちチェックして白いゴム状のものが見えるようであればこれは厚く塗りすぎです、削り取ってください。残しておくことは意味がない。